

*** 今日の健康（4月） ***

<小児の心身症 チック障害>

近年、子どもを取り巻く環境の変化として、核家族化、少子化、母親就業の増加などがあり、これらによる親子関係、家庭問題に起因する精神的な問題、さらに、学校や社会環境の悪化などによるストレスが加わることにより、心身症をはじめとする心因性の障害が増えてきています。

精神的な緊張や不安が原因となって、身体、精神、行動に異常な反応が出現することがありますが、これらは心身症、神経症、行動異常の3つに分類されます。

心身症とは自律神経を介して、驚くと心臓がドキドキするなど、いろいろな器官に反応を起こし、症状が出ることをいいます。

神経症とは心に反応をきたして、些細なことにも悩んだり、恐れたり、不安になったり、強迫観念など精神面に異常な反応をきたすことをいいます。

異常行動とは習癖異常、暴力、反抗、非行などの社会的問題、登校拒否など行動面にさまざまな障害をきたすことをいいます。

<チック障害>

チック障害は、四肢の筋肉などに反応を起こして症状をきたす心身症に分類される症状で、本人の意志に関係なく、突発的に、頻繁に繰り返される筋肉の速い運動で、顔面の筋肉に多く出現します。多くは、しかめる、まばたきする、咳ばらいする、鼻を鳴らす、首を振る、肩ゆすり、手足のピクつき、思わず声を出す（音声チック）などです。5～8歳に多く、男女比は3：1で男子に多くみうけられます。



<チックの分類>

1. **一過性チック**：まばたきチックなどの単純性で、軽症です。多くは1～6ヶ月で治り、1年以上つづくことはなく、チックの大部分を占め、原因は精神的緊張からの解放のための代償的行動と考えられています。心因性反応の一つで睡眠中は見られず、緊張により増悪します。
2. **慢性運動性または音声チック**：1年以上持続的または間欠的につづき、多くは多彩な運動性チックあるいは音声チックで難治です。運動チックと音声チックが共存することはありません。
3. **トゥレット障害**：多彩な運動性チックと音声チックを伴い、慢性で難治性です。音声チックは意味のない発声（ハッハッとカッカッと）で、汚い言葉を出すものもあります。チックの他に強迫行動や注意欠落、多動をものもあります。トゥレット障害は大脳基底核のドーパミン系神経回路の機能亢進状態が原因であることが報告されています。

<治療>

単純な軽症チックは自然に消失することが多いので、周囲があまり神経質に気にはせず、緊張、不安を和らげ、心身をリラックスさせてやるのが治療です。

難治性のもものでは行動療法、薬物療法を併用することがありますが、緊張や不安で症状が増悪するので、精神的な安定を図ることが最も重要です。